

2012年(平成24年)

第57号

(9月15日)



発行所：立正佼成会 京都教会
 発行責任者：渉外部長 宮地啓安
 〒605-0041 京都市東山区三条蹴上
 TEL(075)762-2211 FAX(075)762-2266

心の病の解決には宗教の力を！

人権問題研修会で“夜回り先生”が語る

9月10日、ハートピア京都において、京都府と京都府宗教連盟が主催する「宗教関係者人権問題研究会」が開催された。今回は、「夜回り先生」で有名な水谷修氏の講演と、啓発映画「百香の自由帳」の鑑賞が行われた。

開会にあたって、主催者である京都府文化環境部・稲垣文教課長と京都府宗教連盟・荒木委員長の挨拶があり、引き続き水谷修氏から「夜回り先生、いのちを語る」と題して講演が行われた。

水谷氏は子どもたちの非行防止のための「夜回り」の取り組み、自殺防止のためのメールや電話による相談などの活動から、具体的な事例に基づく、説得力のある話を、息もつかずに講演した。

特に、バブル崩壊後は『昼』の世界に『夜』の世界が入り込んでいると指摘。評価されるより、否定される社会になってきて、大人がそのはげ口を子どもにぶつけるようになってきているという。身体は疲れていないのに、心だけが疲れている。心の病を解決するには、ひとつは身体を鍛えて、身体を疲れさすこと。もうひとつは、宗教の力、心を休ませる場が必要だと述べ、宗教者の役割を強調した。



宗教連盟・荒木委員長の挨拶



講師の水谷修氏

福島原発事故を受けて「行動指針」を発表

9月1日、本会は教団と教会、会員が願いを一つにして、真に豊かな社会の実現につなげていく「行動方針」(下記)を発表した。この「方針」は6月に公表された『真に豊かな社会をめざして一原発を超えて』を受けて策定された。

■教団本部

- ・環境マネジメントシステムの推進
- ・電力使用の可視化と太陽光発電の導入
- ・人、環境を大切にしたい拠点の建設
- ・原発や放射能を正しく理解する学習
- ・原子力発電所で働く方々の人権を重く受け止め、一人ひとりの生活基盤が守られる社会を再構築

■教会

- ・電力消費の削減
- ・地域に合ったエコの推進
- ・相互啓発と環境意識の向上

■会員

- ・「真の豊かさとは何か」について関心を持つ。
- ・「いのちの尊重」「共生の実現」「簡素なライフスタイル」を旨として、日々の暮らしのあり方を振り返る。
- ・家族、地域の人々、自然の恵みへの感謝と平和の祈りのある生活などを話し合い、実践する。

お知らせ(10月の教会行事)

10月	1日(月)	朔日参り	9:00~
	1日(月)	同 夜間式典	19:30~
	4日(木)	開祖さま入寂会	9:00~
	4日(木)	同 夜間式典	19:30~
	13日(土)	お会式・日蓮聖人遠忌法要	9:00~
	15日(月)	釈迦牟尼仏ご命日	9:00~

今月から岡崎の京都教会第一ホールが解体工事にいった。昭和三五年の開館以来五〇周年を経てのリニューアルにとりかかる。平成二七年八月に竣工の予定だ。▼京都教会は「文化の殿堂」として愛されてきた。しかし、施設の老朽化や舞台機能や音響面での問題を抱え、再整備することになった▼筆者は高校生の時吹奏楽コンクールに出場した。現在は会場がコンサートホールに移っている。リニューアルによって、京都教会で再開されることになるかもしれない▼京都には歴史と文化の街と言われる。確かに日本の都道府県で一番の国宝がある。歴史があるから尊いというだけでなく、長年人々に支えられてきたところに意義があるのではないか▼現代に培われたものが、未来の文化財になるように、伝統文化を大切に守るとともに、将来に伝える新文化を創造することも大切だ。今回のリニューアルを通して考えてみたい。

時事刻々

かめおかこころ塾 震災復興における宗教者の役割

9月8日、亀岡市民新聞社が主催の「第37回かめおかこころ塾」がガレリアかめおかに於いて開催された。同塾は亀岡宗教懇話会の加盟教団から講師を出すことになっていて、今回は本会・外務部長の根本昌廣氏が「震災復興における宗教者の役割～立正佼成会の事例を通して～」と題して講演を行った。

東日本大震災翌日の3月12日、根本氏自らが隊長となって約10名の先進隊が現地に派遣された。その体験から、被災地の人たちをかわいそうだから助けてあげるといふ気持ちでなく、その人たちも自分の家族と思えるかどうかを最も重要と力説した。

会員からのボランティアはのべ6,586人、本部職員はのべ3,189人、他にも傾聴ボランティア派遣(じっくり話を聞いて寄り添うボランティア)を行った。

今回の災害は、1. 範囲が超広範囲、2. 被害が甚大、3. 放射能汚染、被爆、4. 行政が壊滅した地域も存在、5. 東北寒冷地での災害(凍死者の発生)、6. 生産流通

システム損傷によるガソリン、灯油の枯渇(ガソリンスタンド9時間待ち)、7. 風評被害の深刻性、8. 復興、再生の長期化が特徴だったという。

震災からの学びとして、危機的状況により見ず知らずの人たちの絆が深まったこと、一番苦しむ人(家族)に寄り添っていくこと、震災を忘れないため努力し続けること、いのちに感謝・まず人さまの菩薩行・今に心を置いて生きることの大切さを述べた。

さらに、横の絆(自己益→社会益→国益→世界益、人類益)の広がりにより対立や紛争がなくなること、縦の絆(過去、現在、未来の命)から普遍的利益を見い出せるという持論を述べ、講演を結んだ。



元気で長生きを！ 京都教会「敬老会」を開催

9月1日、京都教会体育館において敬老会が実施された。冒頭にサングラスをかけてダンディーな雰囲気登場した佐藤教会長に会場は大いに盛り上がった。少年部や青年部からも参加者に喜んでもらおうとお手伝いもあり、和やかで楽しい一時を過ごしていた。



「議員交流会」に京都から2人の議員が参加

8月28日・29日、平成24年次議員交流会が法輪閣と第二団参会館で開催され、京都から中野洋一・山本拓史の京都市議会議員2人が参加した。

28日の開会式に続き、参加者代表として宮城・女川町議会の木村征郎議員が体験発表。東日本大震災発生当日の同町の状況を報告し、今後の復旧・地域再生への思いを発表しました。その後、特定非営利活動法人ジェンの木山啓子事務局長が『災害時の緊急支援～国際支援の現場から～』をテーマに講演した。

参加した中野議員は『講演も学びになり、本当にいい経験だった』と感想を述べた。

●合掌・礼拝

①合掌は人間の本来の姿

(いつでも、どこでも、だれにでも実践できる行法)

生まれて一週間目の赤ちゃんはどのような動作をするのでしょうか。京都大学の園原教授(心理学)と神戸大学の黒丸教授(精神医学)の研究所が協力して赤ちゃんをつぶさに観察しました。それによりますと、生まれてすぐの赤ちゃんは両手と両足を開いてそれを閉じる。その時の両手は合掌の形になっています。またくちびるの両端は少し開いていますが、それはどうしても微笑としか思えないというのです。

その報告に対して、わが国の仏教哲学の第一人者である玉城康四郎博士が次のように論評しています。「この二つの間歇的運動は、私には生まれる前のあの世か

らのメッセージであると思えません。こうして手を広げて、こうやる、合掌する。この運動は宇宙そのものの生命に順応し、一体になっていくという合掌の姿であると思います。これは人間にとって最も自然な形であります。これを宗教的というのは後につけた人間の分別です。そうでなく、天地の生命と一つに溶け合うところの自然な形であり、それが合掌の形になったものと思います。その何ともいえない生命の喜び、それが微笑になって現われてきているのでありましょ」と。これは『宇宙意識への接近』(春秋社刊)に掲載されている話です。

『宇宙意識への接近』を読まれた開祖さまは「合掌が深いところからきている人間の本来の姿であることをつくづく思いました。そして、すべての人間に具わっている仏性というものが、決して絵空事ではないことをしみじみと思わされたのでした」と感想を語っておられます。

今月の言葉 ～息を調える生活を目指して～ 京都教会長・佐藤益弘

先月中旬に起きた京都府南部豪雨により、多くの被害がございました。先ずもって犠牲になられた方のご冥福をお祈り申し上げます。また、被災された皆様にご心からお見舞い申し上げますと共に、一日も早い復旧を祈念申し上げます。

さて、佼成9月号では、会長先生から「**息を調える**」というご法話をいただきました。

前半の《**呼吸に意識を向ける**》というご法話の中で、呼吸が極めて重要であるということが書かれています。私など普段、呼吸のことを気にも留めずに生活しておりますので、非常に考えさせられました。大地があり、水があり、太陽があり、空気というものがあるからこそ人間は生きられると同時に、呼吸できるお蔭で生きることが叶っているということに意識を向けておりませんでした。特に呼吸（息）ができること、そのことに意識を向けるとか、念を凝らすということは殆どありませんでした。ある方のお話によりますと、「人間は一日におよそ2万回息をする」ということだそうで、それほど繰り返しの連続の中で生きられること、よって呼吸が極めて重要なことであるとの認識を深めることができました。

そして、「呼吸に意識を向けるのは、人間の生きる原点である息をとおして**身心をコントロールする身近な方法**なのです」というお話が大切なところだと思います。

後半の《**感謝の気づきを生む**》というご法話の中に、「ほんとうは日常生活のなかで、ゆったりと息をすることが大切なのです」とあります。さらに「ひと息ひと息に意識を注いでいくと、身も心も落ち着いてきます」とおっしゃっています。そして、結びとして、「同時に、呼吸や心臓が一瞬も休まずにはたらくてくれている生命の不思議に気づくと、『**生かされている**』ことへの**感謝**の自覚が生まれます。その自覚が、欲や慢心からわが身を守り、自己コントロールという『大果・大功德』をもたらすのです」とお話をくださっています。

今月は、本会草創期より、信者の救いと教化、育成のために身命を賭して慈悲行に徹しられた**脇祖さまの報恩会**（10日）式典が執り行われます。「まず人さま」と分かりやすく仏さまの教えの実践へと導いてくださった師匠に倣い、喜んで布施行をさせて頂くことが脇祖さまへの報恩行になるものと思います。その**布施行は六波羅蜜の第一の徳目**でもあり、それから持戒、忍辱、精進、禪定へとつながるわけです。當に身も心も落ち着いている状態です。そこまでいっぺんに到達するのは難しいので、先ずは布施行から始め、あわせて息を調べていくことが自己コントロールできる人になるために欠かせないものと学びました。

また、吐くことと吸うことの両方があってこそ呼吸できることから、何事もバランスが大事であることも改めて学ばせて頂きました。仏さま、自然の恵みを沢山いただきながら生きている人間が、賜っていることに対して、何をもってお返しできるかということも考えながら生活して参りたいと思います。第253世天台座主・山田惠諦猊下は、ご著書「己を忘れて 他を利用する」（佼成出版社刊）の中で次のようにお書きくださっています。「仏教に『**自利利他**』という言葉があります。自ら利益を得、他人にも利益を与えること、自ら悟りを求め、人々に対しては救済し利益を与える、という意味です。でありますから、自利利他というのは自利と利他が同じ重さでなければならないのであります。自利が重くて利他が軽いと間違いが起きやすい」というお話です。さらに、そのバランスをとるのは難しいこととおっしゃりながら、自利を重くしがちな人間だからこそ、「**己を忘れろ**」とおっしゃっています。私は山田惠諦猊下のご著書を通じて学んだ、自利と利他のバランスの大切さと、会長先生が呼吸を通して、尊いのちを頂いている人間として、**バランスのとれた生き方**をすることのお話と相通ずるものがあると受け止めました。

この一か月、先ずは息を調える生活を目指し、さらに身も心も調えながら精進して参りたいと存じます。

カウントダウン第60号（その2）

～第14号 2009年2月15日発行より～

京都教会50年の歩み（1回目）

■京都布教の源流

本会の地方布教は昭和22年の茨城をかわきりに東日本を中心として展開されていたが、関西布教は昭和25年頃から佐野元章夫婦らの捨て身の神戸布教から始まるとされている。そして神戸支部を形成するまでになり、その神戸支部の京都組として、京都にご法が

12月15日発行の第60号で丸5年を迎えます。この5年間の記事の中からピックアップして再び記事を載せます。

広がっていくのだ。

また、東日本の会員との縁によって、入会した京都の信者さんもあった。その最もご縁の深かったのが第三十九支部だった。この第三十九支部の京都所属の信者と神戸支部の京都組の会員など、初期に入会された多くの先達たちのおかげで今の京都教会の基礎が築かれていった。



庭野開祖の宗教観・平和観 「一乗の道」

《後事に憂いなし》

法華経の真理、宇宙の大法則を説いて仏道に導こうとしても、だれもがすぐに理解できるというものではない。真理の教えとはどういうものか、具体的につかんでもらうのが方便である。だから、方便即真実であり、真実も方便を通して本当に人々に理解してもらえるのである。

立正佼成会の歴史を振り返っても、真実顕現の時代、普門示現の時代に入ったのだから、もう方便は必要ないといったことはなかった。自ら行じることによって、まず自分が変わり、それによって相手に変わってもらい、社会全体を変えていく。その努力によって一人でも多くの人に、真の救いをもたらしていくのが立正佼成会の信仰なのである。

法燈継承にあたり、庭野開祖は日鑛新会長にこう話した。「人がたくさん集まり、建物が威容を誇っているというだけが繁栄ではない。信者一人ひとりの中に信を植え付けていくことこそが、本当の大事だ。どんな形の活動を進めるのであれ、一人の人間を大事にする。その人に、本当の救いをもたらしていく。それが最も大事なことだ。人が集まるかどうか、様々な活動が盛んになるかどうか、つまるところ、その一点に帰すると言っていい。『一人の人を救いきる』ことが佼成会の創立精神なのだから」と。

どなたの言葉だったか失念したが、法華経学者として著名な小林一郎先生が、こんなことを言われていたそうだ。宗教が墮落する場合、二つの形があって、一つは腐敗。もう一つが乾燥だという。信者の苦悩や欲求を利用して教団の繁栄だけを考えるのが腐敗。そして、リーダーが社会大衆の苦悩や欲求がいかなるものかを知ろうとせず、自己満足に陥ったときが乾燥なのだそうだ。心すべきことであろう。

会長位を譲り、任せたからには、すべて二代会長の考え方、やり方に委ねるとするのが庭野開祖の考えであった。なんの心配もしていなかった。その思いは日鑛新会長にも伝わったと思う。「会員はみな親戚、家族の気持ちで異体同心になって精進したい」と決意を語り、自ら「親戚回り」と称して、全国の教会を訪ねる行脚を開始した。平成4年の2月から、ほぼ1年をかけて、大聖堂での第1回を皮切りに、海外教会を含め130会場、延べ日数80日、全走行距離6万キロに及ぶ

巡教だった。

《直子夫人のこと》

日鑛新会長が、立正佼成会の法燈を継承する決意をしたその姿を見て、誰よりも喜んでいたのは、庭野開祖の妻の直子夫人だった。庭野開祖自身は、子供たちや妻にとって決して良い父親、夫だとは思っていなかった。しかし、同様に創立当時の佼成会では幹部たちが大なり小なり家庭を犠牲にし、家族のだんらんを目をつぶって精進して下さったのである。

直子夫人にとっては庭野開祖は一家の主であり夫であって、一家を支えていく責任のある身であった。しかし一方で、立正佼成会の会長として法華経をあまねく人々にお伝えする使命を負っていた。仏さまは国城・妻子を捨てて仏道のために生涯を捧げられたが、庭野開祖もまた、商売を捨て、家を捨て、肉親の情を断ち切らなくては、その使命の一端すら果たす事ができなかったのである。

子供たちにも「13年間も父親と別居させられた」という思いが、長い間わだかまりとしてあった。次男の欽司郎氏が高校生のころ、兄弟げんかをしていたのを庭野開祖が叱ったことで、欽司郎氏が庭野開祖に飛びかかり、逆に組伏せられたことがあった。

その後で庭野開祖が言った言葉を、欽司郎氏は今も覚えているという。「私はお前たちに特別の人間になって欲しいとか、特別の修行をしろと言っているのではない。ふつうの人間であってほしい。ただ、私たちは仏飯を頂戴している人間なんだから、そのつもりで、日頃の行いを慎まなければならない。朝晩のご供養くらいは、ちゃんとやらなければいけないのだ。やり方が解らなければ、私の真似をしてやればいい。私の言っている事が無理で、どうしても出来ないというのなら、お前たちとは縁を切ってもいい」

欽司郎氏は悔し泣きをしたが、飛びついて組伏せられた時に父親の体温が感じられて嬉しかったと、のちに話している。いつの頃からか、直子夫人は子供たちに「お父さんが私に言ってきたことは、みなその通りになっています。お前たちも、お父さんの言うことは、しっかりと聞かなければだめですよ」と言い聞かせるようになっていた。欽司郎氏も本部に出るようになり、先輩方に鍛えられて、色々なお役を務めるようになった。(つづく)

渉外部からのメッセージ

暑い夏の期間が過ぎ、近畿圏では関西電力による計画停電の期間を終えました。一応、原子力による発電の必要性がなくなった訳です。東日本大震災で放射能の怖さを体験したにも関わらず原子力発電所を稼働させなければならなかったのには様々な理由があるので

しょうが、国民自身が少欲知足の精神、つまり簡素なライフスタイルを身につけることも重要であると思います。まずは自ら、そして人にもすすめたいものです。この月報はホームページでもご覧頂けます。

アドレスは <http://rkk-kinki.blog.ocn.ne.jp/kyoto/>